

陶寺遺跡は山西省臨汾市讓汾県城から東北に7.5キロにある塔兒山の麓に位置しています。この遺跡は東西約2,000m、南北約1,500m、総面積は300万平方メートルあります。考古学者達の発掘により1,000か所あまりの墳墓及び陶窯、家屋などの遺跡が発見され、大量の玉、骨、石、陶器などの装身具や生産や生活の道具が出土されました。そして、放射性炭素年代測定法により4,500年前の文化遺跡と分かりました。

陶寺遺跡の考古発掘は大きな意義があり、中国の文明史は紀元前2,500年からだと証明することができました。これによって中華民族の五千年文明は考古学の面でも認められています。これは極めて重要なことです。中国五千年文明は今まで伝説と史実によって語られてきましたが、その発掘の成果で確実に歴史的事実が証明されたのです。

この陶寺遺跡で、世界最古の天文台遺跡が発見されています。

約4,000年前に造られたと見られています。

天文台は直径約40mの土で固めた半円形で、直径約60mの外円が取り囲んでいます。中心には高さ4mの計13本の石柱が立てられており、日の出の方角を観察しながら季節の移り変わりを理解するのに使ったと見られます。

中国社会科学院考古研究所が、この遺跡で1年半にわたって模擬天文観察をおこなったところ、中国で現在も広く使われている旧暦と1、2日の誤差しかなかったそうです。発見



陶寺天文台跡 (新華社)



陶寺古観象台遺址復元 (中国サイト・百度百科より)

幅の狭い観測用隙間の内側の観測点に人が立ち、柱と柱の狭い隙間から、高い山(独立峯)に上る太陽を観測する。冬至に太陽が昇るのは、南端の隙間から観測でき、夏至では、北の端の隙間から観測する。その他、それぞれの観測用の隙間は異なる季節に対応し、観測結果によって季節を確定すると共に暦策定のよりどころとなる。観測の対象が、“太陽の出る処(明るくなる処)”であるため、この地一帯を“晋”(上げる・進めるの意)と呼ぶようになった。

(中国サイト・百度百科抜粋)

された天文台は観測以外にも祭祀にも使われました。

中華文明伝説上の三人の聖人、堯、舜、禹はここ山西省で活躍したと言われています。堯が多くの部落の長となった時、機能的に住みやすい街作りをし、当時の中心地位を確立し、華夏文明の基礎を定めました。先秦時代の史籍の中に最も早く使われた「中国」という言葉は堯の建立した「古唐国」を指しています。

堯は晩年、盟主の座を自分よりもっと才能のある舜に譲りました。

舜は帝位についてから、多くの民衆に徳を施し、それまでの部落連盟の会議を次第に国家機関にし、華夏文明を前進させました。

舜も晩年、より才能の有る禹に帝位を譲りました。禹は中原地方で部落連盟の最後の長になり、中国歴史上で国家政権の創始者になりました。つまり禹によって中国は文明発展の時期に入ったのです。禹は民衆を率いて大規模な治水を行い、民衆に安定した生活環境を作り、中国で最初の水利専門家となりました。その功績は永久に中華民族の史籍にとどめられています。

多くの研究者は陶寺遺跡の発掘と出土され

た多くの文物が初めて考古学の面で堯、舜、禹の存在を証明出来ると思っています。陶寺遺跡は期間と地域があたかも堯・舜文明と相応していて、出土された文物と遺跡は堯・舜時代の生産と生活の記録です。

長い間、歴史研究の分野で堯、舜、禹は美しい伝説に過ぎないと思われていました。陶寺文化の発見はこのような古い見方を変えるかもしれません。

国際交流員として2004年から2年間、青森県に来日した鄧仁有さん。その後帰国され、山西省太原市にある旅游学院の日本語ガイド養成コースで教鞭をとられています。前回に引き続き、鄧さんが執筆した日本語ガイド資格試験用テキストから、山西省の名所旧跡をご紹介します。